第一章　柏木の物語　女三の宮、薫を出産

［第一段　柏木、病気のまま新年となる］

衛門督の君（衛門督の藤君は）、かくのみ悩みわたりたまふこと（この憂つ状態のまま苦しみ続けなさるばかりで）、なほおこたらで（少しも直らずに）、年も返りぬ（年も改まりました）。

*大臣（父の太政大臣藤原殿や）、北の方（母であるその奥方という貴人が）、思し嘆くさまを見たてまつるに（自分の事を案じて嘆きなさる様子を拝し申せば）、　*「おとど、きたのかた」という言い方は、その身分にある人を示す普通の言い方なのかも知れない。が、「見たてまつる」衛門督からすれば、彼らをその公的な立場よりも父母として先ず認識するように、現代の平民である私などは思う。だから、是は読み違えている可能性もあるが、ここで「おとど、きたのかた」と言うのは、その高貴な存在と、その家に生まれ育った自分の人生の意味を、衛門督は客観的に考えようとした、と私は読んで、左様に補語して置く。

「*しひてかけ離れなむ命（その大事に御育て下された御心に、背いて死に掛けている命の）、かひなく（不幸と）、罪重かるべきことを思ふ（不孝を思う）、心は心として（気持はあるものの）、また（他方では）、あながちにこの世に離れがたく（無闇にこの世に未練を持って）、惜しみ留めまほしき身かは（生き永らえたい我が身ではない）。　*「しひてかけ離る」は父母の愛に＜敢えて背く＞という意と、「命」を＜捨て掛ける＝死に掛ける＞の複意、と取る。「なむ」は傾向の強調。

いはけなかりしほどより（幼い時から）、思ふ心異にて（考えが普通ではなく）、何ごとをも、人に今一際まさらむと、公私のことに触れて、なのめならず思ひ上りしかど（何でも人より勝っていたいと公私に渡って並々ならず自負していたが）、その心叶ひがたかりけり（その思いは叶えられなかった）と、一つ二つの節ごとに、身を思ひ落としてしこなた（と一つ二つの失敗に自信を失くして以来）、

*なべての世の中すさまじう思ひなりて（全ての世の中がつまらなく思えて）、後の世の行なひに本意深く進みにしを（来世のための勤行修行を思って出家に気持が深く傾いたが）、　*「なべての世の中すさまじう」の言い回しは、注に＜明融臨模本、朱合点、付箋「大かたの　わか身一の　うきからに　なへての世をも　うらみつるかな」（拾遺集恋五、九五三、紀貫之）とあり、大島本も、朱合点、付箋「大方は　我身一の　うきからに　なへての世をも　うらみつるかな」とある。＞の参照指摘がある。この時代に都々逸があれば「空があんなに青いのも　電信柱が高いのも　郵便ポストが赤いのも　みんなあたしが悪いのよ」と笑い飛ばして救われたのかも。でも、この引歌にも遊び気分があるような気はするが。

親たちの御恨みを思ひて（親たちの御嘆きを思えば）、*野山にもあくがれむ道の重き*ほだしなるべくおぼえしかば（隠遁生活に明け暮れる道の重い足かせになるように感じたので）、とざまかうざまに紛らはしつつ過ぐしつるを（出家を思い詰めないように、あれこれと気を紛らせて日々を送ってきたが）、つひに（此処に至って）、　*「野山にもあくがれむ道」は注に＜明融臨模本、付箋「いつくにか　世をはいとはむ　心こそ　野にも山にも　まとふへらなれ」（古今集雑下、九四七、素性）とあり、大島本も、朱合点、付箋「いつくにか　世をはいとはん　心こそ　野にも山にも　まとふへらなれ」とある。＞とある。「あくがる」は＜憧れる、さまよう、浮かれ歩く＞とあるが、此処では「まとふ（惑う、迷う）」に近い言い方らしい。「へらなれ」

はドジョッコフナッコの＜夜が明けたと思うベナ＞だ。　*「ほだしなるべく」は注に＜大島本、朱合点。『河海抄』は「世の憂きめ見えぬ山路へ入らむには思ふ人こそほだしなりけれ」（古今集雑下、九五五、物部吉名）を指摘。＞とある。この引歌は前にも引かれていたが、詞書が「同じ文字なきうた」という大喜利物で、気持ちの深さではなく言い回しの妙が主眼らしい。いや、しかし、言い回しの妙こそが真理を探求する心の深さを表わす、という見方は興味深い。ともあれ、この衛門督の弁、と言っても内心文だが、の古歌の引き方は意味の割に言い回しが軽いような気がするが、読み間違いだろうか。それとも、やはり、深刻な事を軽妙に言う所が文化人の真骨頂だ、という作者の主張なのだろうか。

なほ（どうしても）、世に*立ちまふべくもおぼえぬもの思ひの（政府を率いれそうに思えない失態を）、*一方ならず身に添ひにたるは（他人を巻き込んだ形で仕出かしてしまったのは）、我より他に誰かはつらき（自分以外の誰の責か）、心づからもてそこなひつるにこそあめれ（自分の考えで招いた失敗に他ならない）」　*「立ちまふ」は＜立ち回る＞と古語辞典にある。「世に立ち舞ふ」は＜公に活躍する＝政府を率いる＞。藤原権勢家ならではの自負、かと思う。　*「ひとかたならず」はこの衛門督の弁にある理屈からすれば＜自分ひとりの後悔で済む失敗ではない＝他人に迷惑を掛けた＞という意味に見える。

と思ふに（と衛門督は考えて）、恨むべき人もなし（恨む相手もいません）。

「神、仏をも*かこたむ方なきは（神や仏にも縋りようも無いのは）、これ皆*さるべきにこそはあらめ（全てが宿命だからでしょう）。　*「かこつ」は「託つ」で＜口実にする、言い訳にする、他の所為にする、こじつける＞の他に＜嘆く、恨む＞とも辞典にあるが、此処では相手が神仏なので＜託す、任せる、縋る＞くらいに取って置く。　*「さるべき」は＜当然の因縁＝宿命＞。

*誰も千年の松ならぬ世は（人は誰も千年生きる松とは違う一生で）、つひに*止まるべきにもあらぬを（いつまでも生き続けられるものでは無いのだから）、かく、人にも（このように誰かに）、すこしうちしのばれぬべきほどにて（少しは惜しまれる内に）、*なげのあはれをもかけたまふ人あらむをこそは（気まぐれの同情でも掛けて下さる人がいるだろうことを）、*一つ思ひに燃えぬる*しるしにはせめ（せめて燃え尽きるなぐさめにしよう）。　*「たれもちとせのまつならぬよは」の出典参照は＜「憂くも世に　思ふ心に　叶はぬか　誰も千年の　松ならなくに」（古今六帖四−二〇九六）＞と指摘がある。　*「止まるべき」は、「止まる（この世に留まる＝生き永らえる）」に可能の助動詞「べし」が付いたものの連体名詞で＜生き続けられるもの＞。　*「なげのあはれ」は＜うわべの同情＞と大辞林にある。「なげ」は「無げ（中身が無い）」や「投げ（気まぐれの）」の語感らしい。　*「一つ思ひに燃えぬる」の出典参照は＜「夏虫の身をいたづらになすことも一つ思ひによりてなりけり」（古今集恋一−五四四　読人しらず）＞と指摘がある。　*「しるし」は＜道標＝心の拠り所＝救い＝なぐさめ＞。

*せめてながらへば（これ以上強気で生き通して）、おのづからあるまじき名をも立ち（その内どうしても密通の噂が立ち）、我も人も（私も宮も）、やすからぬ乱れ出で来るやうもあらむよりは（平穏ではいられない混乱が生じるよりは）、*なめしと（あなどられたものだと）、心置いたまふらむあたりにも（根に持っていらっしゃるだろう源氏殿も）、さりとも思し許いてむかし（私が死んでしまえば、さすがにお許し下さるだろう）。　*「せめて」は＜強いて＝強気で＝我を張って＞。此処では藤君は強気を否定して、一貫して弱気な考えに終始しているが、密通に踏み切った時点では、自分の中に強気が起こる事を期待していたようでもある。若菜下巻十二章二段で、試楽の宴を中座した藤君が「つつましとものを思ひ

つるに、気ののぼりぬるにや。いとさいふばかり臆すべき心弱さとはおぼえぬを、言ふかひなくもありけるかな」と嘆いたことは印象的だ。其処で勝負があった、ワケだ。　*「なめし」は＜無礼＞と古語辞典にあるが、語感では＜ナメたマネをする、ナメられる、安く値踏みされる、あなどられる＞に近いのではないか。

よろづのこと(万事は)、今はのとぢめには(死を以て)、*皆消えぬべきわざなり(償えるだろう)。*「皆消えぬべきわざなり」という楽観は、犯人本人だけは言ってはいけない、持ってはいけない考えなのではないのか。自分では後始末が出来ない、とか、天に委ねる、時に任せる、などというのは、主張は出来ないまでも、思う事くらいは許されそうだが、子供の将来に責任が無い、みたいなことは、特に高官であれば、思う事も許されない倫理であって欲しい。ところが、昨今の世情は正にこの無責任が蔓延している。何かが欠けている。そんなに急ぐな、とは思うが、止める術が有るのかどうか。世界は何処へ向かうのか。とまで、思ってしまう。

また(それに)、異ざまの過ちしなければ(他には特に過ちをしたことは無いので)、年ごろものの折ふしごとには(毎年の季節行事の時には)、まつはしならひたまひにし方のあはれも出で来なむ(親しくお側にお呼び下さった私を思い出しなさるだろう)」

など(などと)、つれづれに思ひ続くるも(取り留めもなく思い続けても)、うち返し(今となっては)、いとあぢきなし(もう意味が無い)。

[第二段　柏木、女三の宮へ手紙]

「などかく、*ほどもなくしなしつる身ならむ(どうしてこのように短期間で変わってしまった身の上なのだろう)」と(と衛門督は)、*かきくらし思ひ乱れて(気持を真っ暗にして思い悩んで)、*枕も浮きぬばかり(枕も浮いてしまうほど)、人やりならず流し添へつつ(我ながらの情けなさに涙を流し続けて)、いささか隙ありとて(少し状態が良いからと)、*人びと立ち去りたまへるほどに(見舞いの家族が側を離れなさった間に)、かしこに御文たてまつれたまふ(かのお相手にお手紙を差し出し申し上げます)。　*「ほどなし」は＜短時間＞。「しなす」は＜～という状態にする＞。　*「かきくらす」は＜一面を暗く塗りつぶす＞。　*「枕も浮きぬ」の出典参照は＜「独り寝の床にたまれる涙には石の枕も浮きぬべらなり」(古今六帖五-三二四一)＞と指摘がある。　*「人びと」は敬語遣いなので、親兄弟などの家族。

「今は限りになりにてはべるありさまは(もはや此れまでという私の病状を)、おのづから聞こしめすやうもはべらむを(当然にご存知かと存じますのに)、いかがなりぬるとだに(どうしているかとだけでも)、御耳とどめさせたまはぬも(お尋ね下さらないのも)、ことわりなれど(ままならない事情が有るにせよ)、いと憂くもはべるかな(とても悲しく存じます)」

など聞こゆるに(などとお書き申すのも)、いみじうわななけば(非常に手が震えるので)、思ふことも皆書きさして(書きたいことも皆書き差して)、

「今はとて燃えむ煙もむすぼほれ、絶えぬ思ひのなほや残らむ　(和歌 36-01)

「荼毘の煙も棚引いて、名残りを惜しむことでしょう　(意訳 36-01)

*注に＜柏木から女三の宮への贈歌。女三の宮への愛執とこの世への執着をうたう。「思ひ」は「火」との掛詞。「煙」「火」は縁語。前の柏木の心中「一つ思ひに燃えぬるしるし」と呼応する表現。＞とある。「むすぼほる」は「結ぼる」を「結ぼーる」と情感込めて発音する言い方なのだろう。「結ぼる」は＜むすばれて解けにくくなる。＞や＜露などがかたまって玉になる。凝固する。＞や＜気が晴れないでふさぐ。＞や＜関係がつく。縁につながる。＞と大辞林にある。如何にも未練を表わす言葉だ。「火」なら＜くすぶる＞も近い語感だが、「煙」だと一気に上昇して拡散すること無く、棚引いて暫く空に残る、という語感だ。「引く」は横線、縦線なら「下ろす」だろうか。「割る」はどちらにも使うのか。少しずれるが、朝露を置く、と、棚に物を置く、も似通う言い方。

あはれとだにのたまはせよ(感じ入るとだけでも仰って下さい)。心のどめて(それを頼りに心落ち着けて)、人やりならぬ闇に惑はむ道の光にもしはべらむ(私は自ら選んだ闇を迷い進む道の光にしたく存じます)」

と聞こえたまふ(とお書き申しなさいます)。

*侍従にも、こりずまに、あはれなることどもを言ひおこせたまへり(衛門督は侍従にも余命幾許も無い身ながら性懲りも無く、情け深い色文句を書き遣しなさったのです)。　*「侍従」は小侍従と呼ばれていた宮の側女房で、その母が侍従という宮の乳母であり、小侍従は乳母子として宮の幼友達でもある。此処で小侍従を「侍従」と呼称するのは、乳母の＜侍従＞が引退して里下がりしたか、死んだかで、小侍従が筆頭女房ないし其の一人として「侍従」の呼び名を継いでいる事を意味するのかも知れない。既に若菜下巻でも小侍従を「侍従」と呼ぶ場面は在ったが、其の存在の大きさは最早「小侍従」では似合わないほどだ。また、乳母の侍従の姉が衛門督の乳母であり、小侍従は藤君とも幼馴染だったことが若菜下巻七章一段に語られていたが、其の文は「なほ、かの下の心忘られず、小侍従といふ語らひ人は、宮の御侍従の乳母の娘なりけり、その乳母の姉ぞ、かの督の君の御乳母なりければ、早くより気近く聞きたてまつりて、まだ宮幼くおはしましし時より、いときよらになむおはします、帝のかしづきたてまつりたまふさまなど、聞きおきたてまつりて、かかる思ひもつきそめたるなりけり」とあって、小侍従は藤君の「語らひ人」だと紹介されている。「語らひ人」は宮への取次ぎを頼む＜相談相手＞と表面上は読めるが、源氏殿の妻に収まっている姫宮への＜取次ぎを頼む＞ということを、その時点、とは密通前の紫の上の看病で源氏殿が六条院を留守にして二条院に明け暮らす宮の女房の暇な頃、に読者が普通のことと考えた、とはむしろ思えない。この「語らひ人」の語用は藤君の＜情人、召人＞を意味する、というのが当時の作者と読者の共通認識だったのだろう。ところで、侍従が宮の乳母子だということは、その乳母の御侍従は王家血筋に違いない。また、その御侍従の姉が藤君の乳母だということは、同時に藤原氏の縁者でもある事を意味する。藤君の父方の祖母の大宮は桐壺帝の妹宮という内親王だった。つまり、この侍従も相当な貴人だ。実力の乏しい家格だとしても、王家血筋はそれ自体に商品価値がある。藤原氏なら実力本意で財力や人員動員力で敬意を克ち取るが、王家人脈は信義次第で無冠でも朝廷の身内としての利用価値がある。いやむしろ、無位であるほど、実態はともかく、一面では当時に於いては稀有な存在かと思える＜独立自由人＞だったのかも知れない。当然に限定的ながら、思考上では立場の柵が少なく、本人の自由意志で行動できる。召人に甘んじているのは、相手が藤氏惣領の衛門督だからこそだ。他の藤氏なら夫人に納まるべき人なのだろう。が、藤氏惣領が王家の本家と結んで政治的な安定を図ることの意味を侍従は叩き込まれていて、その価値観で、とは言えそれは客観情勢を十分認識してと言うよりは王朝の生活感に従ってだろうが、結果としては相当に政治的な思惑を孕んだ形で、この人は行動したことになるのだろう。ということで、藤君が宮との密通に及ぶ契機は、若菜下巻七章二段に記されていた艶笑譚通りに、実はこの小侍従との桃色遊戯での冗句が始まりだった、と私は読んで来ていたが、此処の文でそれが正しかったと確認できてホッとしている。

そしてまた、その語り口の軽妙さが、この深刻にも見える場面に於いても引き継がれていることに違和感に近い不思議さを覚える。もしそれが、作者も含めた藤原氏の文人としての意地だとしたら、少し感慨深い。

「みづからも(自分から直接あなたに)、今一度*言ふべきことなむ(もう一度言いたいことなのだが)」　*「言ふべし」は＜聞こえ給ふべし＞などの敬語遣いが無いので、注にある通り＜柏木から小侍従への手紙の要旨である。＞のだろう。で、「べし」は妥当性を示す助動詞で、この手紙が本来直接言うべき内容だったとして、「なむ」は、そうした方が良かった、くらいの言い方なのか、そうしたいが出来ない、なのか。後者だろう。

とのたまへれば(とお書きになっていらっしゃったので)、この人も、童より、さるたよりに参り通ひつつ、見たてまつり馴れたる人なれば(この侍従も幼い時から縁があって大臣邸に参り通っては、衛門督と親しくお会い申して来た人なので)、おほけなき心こそうたておぼえたまひつれ(密通を望みなさった大それたお考えこそ疎ましく思われたものの)、今はと聞くは、いと悲しうて、泣く泣く(死にそうだと聞けばとても悲しくて泣く泣く)、

「なほ(ぜひ)、この御返り(このお返事をお書き為さいますよう)。まことにこれをとぢめにもこそはべれ(本当に此れが最期かと存じますので)」

と聞こゆれば(と申し上げると)、

「われも、今日か明日かの心地して、もの心細ければ(私も今日か明日かの命のような気分がしていて心細いので)、おほかたのあはればかりは思ひ知らるれど(死ぬこと自体の切なさは分かるような気がするが)、いと心憂きことと思ひ懲りにしかば(衛門督とのことは、とても気が滅入ることと思って懲りているので)、いみじうなむつつましき(本当に恐いのです)」

とて(と宮は仰って)、さらに書いたまはず(全くお書きになりません)。

御心本性の(宮御自身の自制心が)、強くづしやかなるにはあらねど(強くずっしりとしていて拒みなさるのではないが)、恥づかしげなる人の御けしきの(引け目に思う源氏殿の御態度が)、折々に*まほならぬが(時々機嫌悪そうなのが)、いと恐ろしうわびしきなるべし(とても恐ろしく辛かったようです)。　*「まほ」は＜十分なさま＞とあり、それを＜満たされた状態＝満足＞と見れば、「まほならず」は＜不十分＝機嫌が悪い＞となる。

されど(それでも侍従が)、御硯などまかなひて責めきこゆれば(御硯などを用意して強く促し申し上げたので)、しぶしぶに書いたまふ(しぶしぶお書きになりました)。取りて、忍びて宵の紛れに、かしこに参りぬ(侍従はその手紙を手に忍んで宵の紛れに大臣邸の衛門督の許に参じました)。

[第三段　柏木、侍従を招いて語る]

大臣(おとど、大臣邸では藤原殿が)、かしこき行なひ人(賢人の)、*葛城山より請じ出でたる(修験道場の金剛山からの修行僧を頼んで)、待ち受けたまひて(招きなさって)、加持参らせむとしたまふ(衛門督快癒のための加持を行わせようとしているところでした)。　*「葛城山(かづらきや

ま)」はYahoo!百科に＜大阪府と奈良県との境にある金剛（こんごう）山地北部の主峰。大和（やまと）葛城山ともいう。＞とあり、さらに＜古くは金剛山も含めて葛城山とよび、修験道（しゅげんどう）の役行者（えんのぎょうじゃ）が修行した葛城山は、南隣の金剛山である。＞とあって、今では＜金剛山＞と言うべきらしい。

御修法、読経なども、いとおどろおどろしう騒ぎたり(御祈祷や読経などもそれはもう大変な騒ぎでした)。人の申すままに(噂を聞いては)、さまざま*聖だつ験者などの(さまざまな仙人風の行者の)、をさをさ世にも聞こえず(少しも世間で評判を聞かず)、深き山に籠もりたるなどをも(深い山に籠もっている者などを)、弟の君たちを遣はしつつ(弟君たちを遣わしては)、尋ね召すに(藤原殿がお呼び出しなさるので)、けにくく心づきなき山伏どもなども(気難しく愛想の悪い山伏なども)、いと多く参る(とても多く参っていました)。　*「ひじりだつ」は＜高僧らしく見える。＞と大辞泉にあるが、「験者(げんじゃ)」は＜加持祈祷(きとう)を行い、すぐれた功徳を引き出せる僧。また、加持祈祷を行う僧。＞または＜修験道の行者。山伏。修験者。＞と大辞林にあり、上文からの文脈からして「聖だつ験者」は＜仙人風の行者＞だろう。

*患ひたまふさまの(衛門督が患いなさる病状は)、そこはかとなくものを心細く思ひて(何処が如何悪いということもなく悲嘆に暮れて)、音をのみ(涙は流さず声だけをうわ言のように上げて)、時々泣きたまふ(時々わめきなさる)。　*この文は典型的なうつ病の症状を述べているように読んでみたが、前後の文との整合性に難があるように思えて、本文に疑義を持った。で、写本画像サイトで当該部分を当たると、例によって確とは読めないが、京都大学本はp.013の二行目に「〜いとおほくまいる　マつらひ太まふさまの　そこはかとなくものを心ほそくおもひてねをの三　時々ハなき太まふ　おんやうしなともおほくハ女乃〜」とほぼ同一文のように見えるが、東京国立博物館本は8/67は「〜まいる　わつらひ太まふさまの　そこはかともなくてかくものをの三　心ほそく思　ねをの三とき々ない太まふ　てり　をん命しなとのおほくハ女の〜」のように見えて、いくらか違う文なのかとも思ったが、違う文意を得るには至らなかった。気になったので調べたまでで、それならそれで良いのだが、やはり専門家の校訂は信じるべきものらしい。とすると、もともと変な文なワケだ。せめて、文頭に＜中納言の＞などの主語明示があって、文末が＜ものなり(というものなのです)＞などの説明語調になっていれば少しは分かり易いかと思うが。それでも、「音をのみ時々泣きたまふ」は分かり難い言い方だ。

陰陽師なども、多くは女の霊とのみ占ひ申しければ(陰陽師なども多くは、災いを為しているのは女の霊とばかり占い申したので)、さることもやと思せど(藤原殿はそのための除霊を努めるべく思いなさったが)、さらにもののけの現はれ出で来るもなきに(一向にもののけが現れ出て来る事も無いので)、思ほしわづらひて(手詰まりに困って)、かかる隈々をも尋ねたまふなりけり(こうした異端の者たちまで頼りなさったわけなのです)。

この聖も(この金剛山の行者も)、丈高やかに(背丈が高く)、目伏し冷たましくて(まぶしつべたましくて、目つきが冷たくて)、荒らかにおどろおどろしく*陀羅尼読むを(荒々しい大声で呪文を唱えるのを)、　*「陀羅尼(だらに)」は＜梵文(ぼんぶん)を翻訳しないままで唱えるもので、不思議な力をもつものと信じられる比較的長文の呪文。陀羅尼呪。呪。＞と大辞泉にある。

「いで、あな憎や(クソッああ厭だ)。罪の深き身にやあらむ(私が罪深い所為なのか)、陀羅尼の声高きは(原語呪文を大声で唱えられると)、いと気恐ろしくて(とても恐ろしい気がして)、いよいよ死ぬべくこそおぼゆれ(いよいよ死んでしまいそうな気がする)」

とて(と衛門督は)、やをらすべり出でて(そっと寝所を抜け出して)、この侍従と語らひたまふ(来ていた侍従と語り合いなさいます)。

大臣は、さも知りたまはず(父大臣はそうともお気付き無く)、うち休みたると(衛門督は寝入っていると)、人びとして申させたまへば(女房たちに申させなさったので)、さ思して(藤原殿はそうお思いになって)、忍びやかにこの聖と物語したまふ(静かにこの行者と祈祷方法の相談などを為さっていました)。

おとなびたまへれど(お年は召していらしたが)、なほはなやぎたるところつきて(今なお陽気な所がおありで)、もの笑ひしたまふ大臣の(よくお笑いになる大臣が)、かかる者どもと向ひゐて(こうした粗野な者たちと対座して)、この患ひそめたまひしありさま(衛門督が患い始めた様子から)、何ともなくうちたゆみつつ(何となく生気を失って)、重りたまへること(重い状態になってしまわれた事を)、

「まことに、このもののけ、現はるべう念じたまへ(どうか悪霊が姿を現すように祈祷して下さい)」

など、こまやかに語らひたまふも(などと悲願してお話になるのも)、いとあはれなり(とても感慨深いものです)。

「*かれ聞きたまへ(あの祈祷騒ぎを聞いてごらんよ)。何の罪とも*思し寄らぬに(父上は私が何の罪で苦しんでいるのかをご存じないものだから、あの有様なのさ。)、占ひよりけむ女の霊こそ(陰陽師どもが占いよった女の霊なるものだが)、まことにさる*御執の身に添ひたるならば(ほんとうにそれほどの宮の御執心が私に取り付いているっていうのなら)、*厭はしき身をひきかへ(忌まわしいこの身も打って変わって)、やむごとなくこそなりぬべけれ(尊いものになるってもんだぜ)。　*「かれ聞きたまへ」は注に＜以下「結びとどめたまへよ」まで、柏木の小侍従に対しての詞。しかし、途中やや心中文的また独語的性格をおびた発言。＞とある。上文の「いとあはれなり」で病床近くの祈祷場面が終わって、御簾内の藤君と侍従の語らいの場面の転じる、という舞台構成で、「かれ」の遠近感を劇的に利用した演出、ということらしい。　*「思し寄らぬに」の「に」は事情説明の接続助詞で、渋谷校訂では此処で読点を打ち、下文に続けて読むようだが、此処の主語が藤原殿で下文の主語が藤君であることからしても、直接の因果が成立していない。この「に」は上の「かれ」という状態を説明していて、此処で句点とすべきもので、下に＜かくありなむ＞などが省かれている弁なのだろう。　*「御執(おんしふ)」は＜宮の御執着＞。　*「厭はしき身をひきかへやむごとなくこそなりぬべけれ」は＜こんな弱気ではなく強気に出られたものを＞と言っているように聞こえる。是は本当にそうなのだろう。しかし、宮は応えてくれる人ではなかった。そういう宮だと、藤君は見抜けなかった。侍従も読み違えた。源氏殿も裏切られて、全員が負けた泥仕合だ。ただ、藤君が勝てなかった分だけ、源氏殿も負け切らなかった。後は立場の優劣に従って清算される、ということだろうか。だがしかし、宮が孕んだ藤君の子種は残っている。猫の夢が藤君の執念のように不気味によみがえる。みたいな味付け。

さてもおほけなき心ありて(こんな風に大それた野心を持って)、さるまじき過ちを引き出でて(あるまじき間違いを引き起こして)、人の御名をも立て(相手の浮名を立てて)、身をも顧みぬたぐひ(身の破滅を顧みない例は)、昔の世にもなくやはありける(昔の世にも無いものでもないと

物語にある)、と思ひ直すに(と考え直しても)、なほけはひわづらはしう(やはり今回は事情が悪くて)、かの御心に(源氏殿に)、かかる咎を知られたてまつりて(この不祥事を知られ申してしまって)、世にながらへむことも(これ以上私が生き続けるのも)、いとまばゆくおぼゆるは(とても顔向けが出来なく思えるのは)、げに異なる*御光なるべし(実に格別な源氏殿の御威光というものなのだろう)。　*「おんひかり」は＜源氏殿の御威光＞。「まばゆし」は照応した表現、と注にある。

*深き過ちもなきに(その試楽の宴では大きな失敗はなかったが)、見合はせたてまつりし夕べのほどより(目を合わせ申し上げた夕刻から)、やがてかき乱り(そのまま錯乱して)、惑ひそめにし*魂の(空をさ迷い始めた魂が)、身にも返らずなりにしを(この身に返らなくなってしまっているのを)、かの院のうちにあくがれありかば(六条院で当てもなく漂っているのを見つけたら)、*結びとどめたまへよ(逃げないように縛り付けて置いて下さいな)」　*「深き過ちもなきに」は注に＜『集成』は「ひどい間違いを犯したというわけでもないのに。相手は后妃というわけでもないのに、という思い」。『完訳』は「后を犯した大罪でもないのに、源氏への裏切りはそれ以上と思う」と注す。＞とある。なるほど、「后を犯した大罪」は内通への疑義として＜反逆罪＞に問われかねない。「深き過ち」が＜朝廷への反逆罪＞なら、どうやら「あやまち」は＜不法行為＞で、「深し」は＜大きい＞を意味しそうだ。あるいは法律上の問題ということをさて置いても、「深き過ち」という言い方には、表沙汰に問題視されている不始末、という語感もあるのかも知れない。確かに概念上は、個人的な恋愛関係は、それが関係者から不貞を訴えられない限りは、公的な問題ではないし、恋愛感情自体は和合であり、社会の結束力に資するとさえ思われ、法規制の範疇外である以前に、長時間試行された環境適用原理の結果として、ヒトが種の保全を多様性を以て効果的に企画すべく備えた基本機能だ。だから、情交自体は「深き過ち」ではない、という言い方は理屈としては通るのかも知れないが、現代語での「深い過ち」は＜法的過失＞を指すというよりは、自意識下での＜深刻な反省＞という語感で、正に今の衛門督の状態を指す気がして、それを注に添った「深き過ち」の意で「なきに」と読むと、とても違和感のある言い方だ。この読み方からすると、私は、古語ではまだ文字使用が限られた文化人の間だけで行なわれていた所為か、言葉の定義や語法には今の大衆社会以上の厳密さがある場合も少なくない、と思っているが、この「深き過ち」と「咎」と「罪」と「おほけなし」など、その他の類語縁語については客観基準による規定の詰めの甘さが目に付いてしまう。だがしかし、そも、この「深き過ち」は＜密通＞のことなのだろうか。此処の文意について、訳文はさも当然のように「后を犯した大罪＝密通」が主題で、それが作者と読者の暗黙の共通認識だとの前提に立っているようだが、密通は源氏殿にバレていて、宮の懐妊もその結果だと殿には知られている。そのことを、此処で前振りにする意図が話者にあるのだろうか。そこで私は、とはいえ元々は語感に引かれてだが、この「深き過ち」をあえて＜密通や懐妊＞のことではなく、「見合はせたてまつりし夕べのほど」と続けて説明されているところの、その試楽の宴席の場での＜大きな失敗＞と読んで置く。　*「魂の身にも返らず」の言い回しは、出典参照に＜「恋ひ侘びて夜よる惑ふ我が魂はなかなか身にも返らざりけり」(能宣集-三二八)＞と指摘がある。大中臣能宣(おほなかとみのよしのぶ)は＜［921～991］平安中期の歌人。三十六歌仙の一人。梨壺(なしつぼ)の五人の一人として後撰集を撰進。歌は拾遺集・後拾遺集などに収載。家集に「能宣集」がある。＞と大辞泉にある。　*「結びとどめたまへよ」の言い回しは、出典参照に＜「思ひあまり出でにし魂のあるならむ夜深く見えば魂結びせよ」(伊勢物語-一八九)＞と指摘がある。

など(などと藤君は侍従に)、いと弱げに(とても気弱そうに)、*殻のやうなるさまして(魂が抜けた脱殻のような様子で)、*泣きみ笑ひみ語らひたまふ(泣いてみたり笑ってみたりして話し掛けなさいます)。　*「からのやう」は注に＜明融臨模本、付箋「うつせみはからをみつゝも」。大島本、朱合点、行間書入「うつせみはからを見つゝもなくさめつ」。「うつ蝉は 殻を見つつも なぐさめつ 深草の山 煙だに立て」（古今集哀傷、八三一、僧都勝延）を指摘。現行の注釈書では指摘されない。＞とある。「古今和歌集の部屋」サイ

トの解説を頼ると、この古今集の歌は、「煙だに立て」が＜太政大臣・藤原基経を弔った後の哀悼の念を示す＞らしく、藤君の贈歌「今はとて燃えむ煙もむすぼほれ絶えぬ思ひのなほや残らむ」（和歌 36-01）に照応しているように見えるので、十分に出典参照に値する、かと思うが。　*「泣きみ笑ひみ」には意外なほどに胸に迫る衛門督の表情を感じる。最もよく自分を知るであろう女は、この侍従だ。が、それも本当の所は分かりそうもない。教養を駆使した筆致と、それが空回りする状況描写に、作者の藤君に対する思い入れの程を見るようだ。作者はこの侍従に似た立場を実体験しているのかも知れない。

［第四段　女三の宮の返歌を見る］

宮も*ものをのみ恥づかしうつつましと思したる*さまを語る（宮ですが、出産の不安をしきりに不都合で引け目にお考えの様子と侍従は衛門督に話します）。　*「ものをのみ」の「もの」は＜物事一般・生活全般＞で「のみ」は＜単に、一様に＞なのだろうか。そんな漠然とした事を、この期に及んで侍従は衛門督に言うのだろうか。いや、それを全般的な話として挨拶がてらに実際に言うこと自体は十分に有り得るが、文として此処で物語るに足ることだろうか。無論、取り立てた事も無い事を語る意味は、実際の会話においても、文に記すにも、それなりに必ずや有るだろうが、今の場面は衛門督が自嘲気味に宮への未練、というか恐らくは、それは宮への募る思慕ではなく自分の冥利としての恋心が適わなかった自分の宿命への無念だろうが、を切々と侍従に語ったところであり、宮がその衛門督の気持に応えることが出来ないことは、宮の気持としても事情としても藤君は分かっていて、だからこそ苦しんでいるのだから、その上で、侍従が応えて言う「もの」とは、今の宮の状態、即ち妊娠九ヶ月で出産間近だということ、を示している、としか私には思えない。つまり、「ものをのみ」は＜出産の不安をしきりに＞だ。「宮も」の「も」は＜同様に＞ではなく、事情説明の強調口調で＜～についてですが＞という言い方、なのだろう。　*「さま」は宮の御様子だろうが「御」が無い。「語る」は召人らしく「聞こゆ」ではない。

さてうちしめり（そのように気落ちして）、面痩せたまへらむ御さまの（面痩せなさっている宮様を）、面影に見たてまつる心地して（目の前に拝し申し上げる心地がして）、思ひやられたまへば（衛門督は自分の子を宿した宮が愛しく思い遣られなさって）、*げにあくがるらむ魂や、行き通ふらむなど（それで空を彷徨う魂が六条院を行き交うのかと）、いとどしき心地も乱るれば（ますます心乱れるので）、　*「げにあくがるらむ玉や」の言い回しについては、注に＜柏木の心中。間接的叙述。『集成』は「もの思へば沢の螢もわが身よりあくがれ出づる魂かとぞ見る」（後拾遺集、神祇、和泉式部）を指摘。＞とある。

「*今さらに（今となっては）、この御ことよ（その御子のことについては）、かけても聞こえじ（何も申すまい）。この世はかうはかなくて過ぎぬるを（私の一生はこのようにはかなく終わってしまうが）、長き世のほだしにもこそと思ふなむ（その子の将来の邪魔にならないかと）、いとほしき（気懸かりだ）。*心苦しき御ことを（宮には辛い思いをさせ申して、心苦しい御産を）、平らかにとだにいかで聞き置いたてまつらむ（せめて安産だとどうか聞き置き申しておきたい）。　*「今さらに」は注に＜以下「いぶせくもあるかな」まで、柏木の独語。小侍従に向かっての発言ではないだろう。＞とある。が、他ならぬ事情を知る侍従に対してであれば、また、これくらいの曖昧表現であれば、実際に口にするのも有り得ないとも言い切れないだろう。私は発言と読んで置く。　*「心苦しき御こと」は＜お産のこと。＞と注にある。ただ、此処でそれを言うのなら、前の「この御ことよ」の「御こと」も＜お産で生まれてくる御子＞と注すべきだ。

*見し夢を心一つに思ひ合はせて(あの時に見た猫の夢の意味を私一人だけが納得して)、また語る人もなきが(宮と希望を共有できずに将来を語り合うことが出来なかったのは)、いみじういぶせくもあるかな(つくづく情け無いものだ)」　*「見し夢」は注に＜猫の夢。懐妊の予兆という俗信がある。＞とある。密通で懐妊したことは、源氏殿はすっかり御無沙汰だったのだから、宮は身を以て分かっている。衛門督は、自分が密通のまどろみの中で猫の夢を見たことも、二人の話題にしたことはあるだろう。そして、藤君にとって宮腹に種を植え付けることは男冥利に尽きることであって、猫の夢が懐妊の予兆であることや、実際に宮が懐妊したことは非常に重要なことだが、その事実は宮も当然に理解していて、決して「また語る人もなき」では無いように見える。しかし、藤君は「また語る人もなき」と思っている。つまり藤君は、自分が見た猫の夢の意味が宮に理解されていない、と考えているワケだ。若菜下巻七章六段には「ただいささかまどろむともなき夢に、この手馴らしし猫の、いとらうたげにうち鳴きて来たるを、この宮に奉らむとて、わが率て来たるとおぼしきを、何しに奉りつらむと思ふほどに、おどろきて、いかに見えつるならむ、と思ふ」とあり、その「この宮に奉らむ」が＜宮への征服欲＞を示していて、後の「何しに奉りつらむ」が＜事態の畏れ多さに気付いた＞ことを示している、と私は読むが、宮は衛門督の胤を受けて孕んだが、藤君に征服はされず、藤君を愛さなかったのであり、藤君の企ては物理的には適ったが、意味としては完成しなかった、ようだ。私には分からない世界なので、理屈で考える想像だが、藤君の本懐とする宮腹への胤付けの意義は、藤原氏が繁栄君臨する正当性を王家血筋によって価値付けられるとする選民意識にある、ように思う。で、その王家血筋だが、生物上の血筋は当然の前提だが、王族文化の継承無しでは何の客観的社会的説得力も無い。即ち、姫宮が藤君を愛し、二人の間の子を其れと意識して、その栄光を自らの人生の目的と据えて、王家に相応しい文化を身に付けさせて育てて、それを藤君が命懸けで補佐することで企画は実現するのであり、それを藤君は夢見たのだろう。その結果、宮が源氏殿の妻に居座るのも良し、いっそ家名を賭して引き取ることも辞さず、だったのかも知れない。しかし宮には、そんな図太い生き方は出来なかった。相当な美男子であったらしい藤君に心動かすこともなかった。かくて、最大の波乱は表沙汰になること無く、複雑な事情として沈降する。ところで、王族文化の継承だが、これが何と現下の、日本文化の伝統継承と皇位継承の問題にまで引き継がれているようなので、少し考えてみたい。先ずは、現在は辛うじて継承されている王家血筋だが、是は現在の社会様式および将来への社会形態変化の見通しからして、血統主義などは早々に廃すべきものに思う。いくら島国で外襲が無く、単一系統が長続きしたからって、そこに見るべき特徴や意味や価値は当然それなりにはあるのだろうが、人類史や有史以来の記録からしても、千年二千年程度の世代積み重ねの種馬価値は生物上の絶対法則でもないし、まして宇宙規模で基準を考えれば、個人努力の尊さを信じるとしても、組織維持は制度の客観検証性に頼る他はない。だから、秘密の礼拝も伊勢神宮の聖地も、その消失を然程には気にすることもない。取り残された古い物の有難さなんていうものは、誰も其処に踏み入る必要がなかったから手が入らなかった台所の隅の土間みたいなもんだ。そういうもんは懐かしいし、無限の価値を託せるように見えたりするが、無きや無いで世の中は回るし、地震も起これば台風も通るし、人類が被曝で滅んでも多分朝日は昇るし、朝日が昇らなくても、光が出ないブラックホールこそが質量の塊らしいし、つまり必ず何かは残るし、意味は後から着いて来る。ただし、現在の日本人が雨風凌ぐ家に住むべくする国体保持に王位継承は必要なので、その委任には三代以上続く社会的貢献度の高い家柄などを要件とする客観的基準を明示して設けて、公選制度を完備すべきだ。当然に伝統文化の継承こそが主題であって、その造詣の深さと国際交友の経験値の高さが王位に求められるし、同時に秩序を担う社会知として国会を最高機関とする各学会の組織運営もその客観性が担保される制度化が図られなければならない。一般に、政治力を強く持たないと制度の確立は出来ないが、是は内規で、利害が対立する事案では無いので、時間を掛けて合意を得ることは可能だし、必要だ。広義の宗旨であり、憲法制定であり、問題は国民の意識、要するに精神力だ。いや、ということは、差し迫った天変地異や戦争などの時機を得なければ実現しないか。いや、戦争に負けても、大地震と福島原発爆発があっても、一時的に男子直系王位が途絶えても、何も無かったように笑って暮らすのが一番だと思

っている人が大多数なら、笑ったもん勝ちということだけが絶対法則か。確かに、救いは子供の笑顔だけ、みたいな気はする。ん!? そう言えば、姫宮は出産間近ではないか。作者は全てお見通しだったりして。いや畏れ入るべきは、女の浅知恵、というか、理屈を捏ね回す以前に存在している生物体、という認識だ。

など(などと言っては)、取り集め思ひしみたまへるさまの深きを(いろいろなことを考え合わせて暫く黙っていらっしゃる衛門督の思い入れの深さを)、かつはいとうたて恐ろしう思へど(一方ではとても危険で畏れ多い考えの人だと思うが)、あはれはた、え忍ばず(また同情も禁じえず)、この人もいみじう泣く(侍従もしみじみ泣きます)。

*紙燭召して(手許明かりを点けなさって)、御返り見たまへば(御返書を御覧になると)、御手もなほいとはかなげに(御字も如何にもか弱そうに)、をかしきほどに書いたまひて(風情ある様子で書いていらして)、　*「紙燭(しそく)」は＜室内用の照明具の一。松の木を長さ 45 センチ、直径 1 センチほどの棒状に削り、先端を焦がして油を塗り、火をつけるもの。手元を紙屋紙で巻くので「紙燭」の字を当てる。また、紙や布を細くひねって油を染み込ませたものをもいう。ししょく。＞と大辞泉にある。時代劇でよく見る室内灯だろうが、特に手紙を読むためなら＜手許明かり＞なのだろう。

「心苦しう聞きながら(ご病状はおいたわしく耳にしておりますが)、いかでかは(とてもお見舞いには伺えませんで、)。ただ推し量り(ただ推し量り、ご本復を願うばかりです)。『*残らむ』とあるは(お歌に「残らむ」とあることに対しては)、　*「残らむ」については、注に＜柏木の和歌（第一章二段）をさす。＞とある。藤君の贈歌は「今はとて 燃えむ煙も むすぼほれ 絶えぬ思ひの なほや残らむ」（和歌 36-01)、とあった。

立ち添ひて 消えやしなまし 憂きことを 思ひ乱るる 煙比べに　(和歌 36-02)

共に煙になりましょう、それで憂いが消えるなら　(意訳 36-02)

*女三の宮の答歌。「立ち添ひて」は＜同じ立場に立って＞だから、藤君が嘘でもいいから宮にどうしても言って欲しかった言葉だ。宮は、この世のこととしては応じられないが、「けぶり(火葬の煙)」としてなら＜応じる＞と言ってくれた訳だ。「立ち添ひて 消えやしなまし 煙比べに」は悲しい事情ながらも楽しく読める。ただ、「けぶり」は＜晴れない気持＞を意味してもいて、「憂きことを思ひ乱るる」も受けているので、もし、宮が子供を念頭に置いて「消えやしなまし」と言っているのなら、あなたが死んでさえ呉れれば、私も割り切って、煩わしい経緯に区切りをつけて、身寄りの無い遺児を引き取ったものと考えて子供を育てます、という意思表示、と深読みすることも出来そうだ。宮が衛門督に恋心が無いことは、重々承知している侍従なれば、そう言い包めて、宮に是を書かせた、ということは十分有り得る。衛門督もその事情は分かっていて、それでも、形だけでも宮が「立ち添ひて」と言ってくれたことに感激する、という立場だったのかも知れない。女郎言葉の嘘八百に身を焦がす客の己れ惚れ、みたいな趣だが、身を焦がすのが愉しみなら、騙されもん勝ちかも知れない。

*後るべうやは(私が死に遅れて空に残る焼場の煙を見送ることなどありません)」　*「おくる」は＜死に後れる、先立たれる＞。「べう」は妥当性の助動詞「べし」の連用形「べく」のウ音便、とのこと。「やは」は反語で、下に「ある」が省かれた言い方。念押しの泣かせ言葉、と取るか、敢えての強調は裏隠し、と取るかは読み手に任される。当然、藤君は泣く。

とばかりあるを(とだけ書かれてあるのを)、あはれにかたじけなしと思ふ(衛門督は感激して有難いと思います)。

「いでや(いやもう)、この煙ばかりこそは(この煙の文字こそが)、この世の思ひ出でならめ(私の人生を意味あるものとしてくれそうだ)。はかなくもありけるかな(でも、所詮‘煙’なんだけどね)」

と(と衛門督は)、いとど泣きまさりたまひて(ますますお泣きなさって)、御返り(御返事を)、臥しながら(寝そべりながら)、うち休みつつ書いたまふ(休み休み書きなさいます)。言の葉の続きもなう(すらすらと書き続くこともなく)、あやしき鳥の跡のやうにて(一字一字がふらふらと足元も覚束無い鳥の足跡のような文字で)、

「行方なき空の煙となりぬとも、思ふあたりを立ちは離れじ　(和歌 36-03)

「当てなく彷徨う煙でも子供に夢は託したい　(意訳 36-03)

*衛門督の答答歌、再贈歌。「ゆくへなき」は＜頼りない、正体がない＞という言い方で、「行方なき空の煙となりぬとも」は＜たとえこの身が死んだとて＞ということらしい。だから、「けぶり」は＜生身の正体は無いが一つの意味在る存在＞であるらしく、「思ふあたりを立ちは離れじ」は自分の未練の象徴として＜思いは六条院を立ち去ることはない＝きっと見守り申したい＞と、先に子供への思いを侍従に語った「げにあくがるらむ魂や行き通ふらむ」に被せた詠み方をしたもの、なのだろう。彷徨う魂の話は侍従から宮に語らせる、という前提で。ただ、煙は熱せられた数多くの微細粒子が水蒸気をまとって上昇するもので、一時的にまとまって見えても、各粒子は上空で飛散する、と認識する現代人にとっては、「ゆくへなき」は＜行き先を特定できない＞という物性が結果として＜宛てが無い＞のであって、本来目指すべき目的地を見失った＜宛てが無い状態＞なのではない。強いて目指すべき場所というなら、その粒子の質量と主に温度物性が上昇を止める大気中の均衡点だろうが、そこに至るまでの一時的な「煙」の状態が「立ちは離れじ(留まる)」という詩情は、確かに象徴的な意味合いを重ねて眺める写真や絵画の情緒としては分かるが、その象徴性が意志を持って作用するというのは、些か漫画世界の理不尽さを覚えさせる。いや、だから、子供の将来を見守りたい気持を漫画空想のこととして愉しむ場面にみえてしまうのが、不思議な印象だ。

*夕べはわきて眺めさせたまへ(夕方は特に良く空を眺めてみて下さい)。　*是は歌の添え句なのだろう。他に此処で是を言う意味は無い、と思う。ということは、上歌の「行方なき空の煙」は＜先が見通せないほどの曇り空＞で、「なりぬとも思ふあたりを立ちは離れじ」が＜それでも鳥はねぐらを間違え無い＞という言い方になる歌意を、「あやしき鳥の跡のやう」な字で表現した、ということになる、らしい。病気で筆が進まないことまで風情に変える執念だろうか。さすがにそれはないだろうと、歌の解釈でも触れなかったが、藤君自身がこう言っているのだから、むしろその情景詠みこそが表意のようだ。で、この添え句は冗句めいた軽口の趣き、なのだろう。

咎めきこえさせたまはむ人目をも(生まれてくる子を憎くお思い為さるであろう源氏殿の目も)、今は心やすく思しなりて(こうして煙となった私の死後は、もはや厳しい追及は無いものと安心なさって)、*かひなきあはれをだにも(思うような子育てが出来なくても、せめて母親の自覚だけは)、絶えずかけさせたまへ(絶えずその子に注いで下さい)」　*「かひなし」は＜甲斐性が無い、稼ぎが無い、実りが無い＞。これは何のことを言っているのか。私が思うには多分、衛門督の考えはこうだ。即ち、本来は生まれてくる子供に対する経済的援助は、実の親である自分が努めるべきだろうが、自分は死に行くし、不

義の子なれば、家としてその援助を申し出ることも出来ない。実際には、その子の庇護は源氏殿に頼むことになるわけだが、殿はその子を快く思わないだろうから、十分な援助が期待できない。全ては姫宮の「あはれ(母親の自覚)」に掛かっている。だから、この「かひなし」は＜十分な養育費が期待出来る訳ではないが、せめて＞くらいの言い方になる、かと思う。密通の露顕を恐れてか、対象を伏せた難文だ。が、この出産間近の時期に、二人の話題は生まれてくる子供のことになる、とは読むべきなのだろう。

など書き乱りて(などと乱れ書きして)、心地の苦しさまさりければ(体調の苦しさがひどくなったので)、

「よし(これで良いから)。いたう更けぬさきに(あまり遅くならない内に)、帰り参りたまひて(六条院に帰り申しなさって)、かく限りのさまになむとも聞こえたまへ(私の状態をこのように最期が近いとお知らせ申して下さい)。今さらに(子供が生まれるという今になって)、人あやしと思ひ合はせむを(人が変だと怪しむのを)、わが世の後さへ思ふこそ口惜しけれ(自分の死後のことまで案じられるのが悔しい所です)。いかなる昔の契りにて(どういう昔の因縁があって)、いとかかることしも心にしみけむ(私はこんな大それたことなどを自分の使命と考えることになったのだろう)」

と、泣く泣くゐざり入りたまひぬれば(と泣く泣く寝所に這い入ってしまいなさったので)、例は無期に(れいはむごに、いつもは際限も無く)迎へ据ゑて(侍従を前に座らせて)、すずろ言をさへ言はせまほしうしたまふを(冗談さえ言いたそうにしなさるのを)、言少なにても(本当に気弱になられて、言葉少なでいらっしゃると)、と思ふがあはれなるに(と思うと悲しくなって)、えも出でやらず(侍従は直ぐには立ち去れません)。*御ありさまを乳母も語りて(すると、衛門督の御病状を乳母も侍従に近付いて話し聞かせて)、いみじく泣き惑ふ(大変に泣き惑います)。　*「御ありさま」は＜衛門督の御病状＞。「めのと」は侍従の伯母。注には＜柏木の容態について、柏木の乳母が姪に当たる小侍従に話してきかせる。＞とある。場面は母屋の御簾内で、かつ寝所に近い場所で、几帳で隔てられた侍従の席に乳母が近付いた、と読んで置く。

大臣などの思したるけしきぞいみじきや(すると、祈祷場所近くにいらした父大臣などがその様子に何か異変を感じなさったのか、御簾内にお入りになって)。

「昨日今日、すこしよろしかりつるを(昨日今日とすこし良くなったようだったが)、などかいと弱げには見えたまふ(今は何故かとても弱って見え為さる)」

と騒ぎたまふ(と騒ぎなさいます)。

「何か(騒ぐことはありません)、なほとまりはべるまじきなめり(どうせ長く無い命ですから)」

と聞こえたまひて(と衛門督は大臣に申しなさって)、みづからも泣いたまふ(自身もお泣きなさいます)。

［第五段　女三の宮、男子を出産］

宮は、この暮れつ方より悩ましうしたまひけるを（宮はその日の夕方から苦しそうにしていらっしゃったが）、その御けしきと（産気づかれた御様子だと）、見たてまつり知りたる人びと（お気付き申し上げる女房たちが）、騒ぎみちて（一同騒ぎ出して）、大殿にも聞こえたりければ（源氏殿にもお知らせ申したので）、*驚きて渡りたまへり（殿は驚いて宮のお部屋にお越しなさいました）。
*「驚きて渡りたまへり」は＜主語は源氏。紫の上のいる東の対から女三の宮いる寝殿の西面へ。＞と注にある。

御心のうちは（殿は御内心では）、

「*あな、口惜しや（つくづく情けない）。*思ひまずる方なくて見たてまつらましかば（余計な事を考えること無く御世話申し上げられるのなら）、めづらしくうれしからまし（目出度いことでどんなに嬉しいことだろう）」　*「あな口惜しや」は＜以下「うれしからまし」まで、源氏の心中。反実仮想の構文。『集成』は「柏木の子という疑いがなければ、正室の腹でもあり、子供の少ない源氏にとって晩年の慶事であるはず」と注す。＞と注にある。確かに、そういう理屈からすれば、この「あな口惜しや」は＜実に残念だ＞という意味に見えなくもない。が、この「あな口惜しや」という言い方の語感としては、理屈よりは実感として＜全く何てことだ、クソッ不愉快だ＞という不快感そのもの、かと思う。理屈で言っても、実子で無い事を承知の上で、正に「晩年の慶事であるはず」という世評に形だけは応えなければならないという責任を感じざるを得ない、という自身の立場を＜つくづく情けない＞と思うだろう。　*「思ひまず」は「思ひ交ず」で＜余計な事を考える＞。

と思せど（とお思いになるが）、人にはけしき漏らさじと思せば（他人には気付かれまいとお思いになって）、験者など召し（修道僧などをお呼び出しなさって）、御修法はいつとなく不断にせらるれば（安産祈願を何時に増して絶え間なく上げさせ為さって）、僧どもの中に験ある限り皆参りて、加持参り騒ぐ（僧たちの中で霊験の強い者ばかりが皆六条院に参上して祈祷を大がかりに上げ申します）。

夜一夜悩み明かさせたまひて（宮は一晩中お苦しみなさって）、日さし上がるほどに生まれたまひぬ（日が差し上がる時に御子は御生まれなさいました）。

男君と聞きたまふに（殿は御子が男の子だとお聞きになると）、

「かく忍びたることの（このような不義の子が）、*あやにくに（不都合にも）、いちじるき顔つきにてさし出でたまへらむこそ苦しかるべけれ（衛門督に良く似た顔立ちで人前にお出になるのは困ったものだ）。女こそ（女なら）、何となく紛れ（化粧や衣装で何かと誤魔化しが利いて）、あまたの人の見るものならねばやすけれ（多くの人の前に出なくて済むので安心だが）」　*「あやにくに」については、注に＜男の子であると、人前に出ることが多い。女の子であると、深窓にあって顔を見られることもなくてすむ。＞とある。「いちじるき顔つき」は＜はっきりと藤君似だと分かる顔立ち＞。

と思すに（とお思いになるが）、また（他方では）、

「かく、心苦しき*疑ひ混じりたるにては（このような煩わしい迷いが混じるようでは）、心やすき方にものしたまふもいとよしかし（男の子のように養育を人に任せ切りで、気を使わずに済

むのも却って良いのかも知れない)。　*「うたがひ」は＜不明に思うこと＞だが、密通自体は明白な事実であって、疑念ではない。だからこそ源氏殿は子供への対処にいちいち、本当の自分の子だとしたら自分は如何するだろう、という事を問い掛けながらあれこれと＜迷う＞のが、この「疑」だ。

さても、あやしや(それにしても不思議な因果だ)。*わが世とともに恐ろしと思ひしことの報いなめり(私が一生の罪と恐ろしく思ってきたことの報いなのだろうか)。この世にて(現世で)、かく思ひかけぬことに*むかはりぬれば(こういう意外なことで罪滅ぼしになるなら)、後の世の罪も(来世の罰は)、すこし軽みなむや(少し軽くなるのだろうか)」　*「わが世とともに恐ろしと思ひしこと」は義母藤壺との不義密通だろうが、内心文にしても、このように明示されることは少ない気がする。　*「向かふ」は＜報いを受ける＝応報する、相当分に見合う＞という語用らしい。今でも、「向く」は方向を示す他に＜似合う、見合う、釣り合う、～用だ＞を意味する。

と思す(と思いになります)。

人はた知らぬことなれば(他人は一向に知らない事情なので)、かく心ことなる御腹にて(こうした格別に御高貴な正室腹に)、末に出でおはしたる御おぼえいみじかりなむと(晩年にお生まれになった御子の殿の御寵愛はどれほど深いだろうかと)、思ひいとなみ仕うまつる(思って忙しく働き申します)。

御産屋の儀式、いかめしうおどろおどろし(御出産祝いの御祝宴は格式があって盛大でした)。「御産屋の儀式」は「おんうぶやしなひのぎしき」と読みがある。「産屋」は「うぶや」で＜出産室＞だが、「儀式」とあるので＜出産祝い＞なのだろう。「産養ひ(うぶやしなひ)」は＜子供が生まれて三日・五日・七日・九日目の夜に行なう祝。この日祝宴をし、親族から産屋に飲食物や衣服を贈る。「うぶや」とも。＞と古語辞典にある。であれば、「御産屋の儀式」は「おんうぶやのぎしき」でも良さそうなので、写本は平仮名だったのだろう。と、写本画像サイトをちら見すると、国立博物館本は「御うふやのきしき」(15/67)で、京都大学本は「御うふやのきしき」(p. 24)だった。

御方々(他の御方様方が)、さまざまにし出でたまふ御産養(さまざまにお贈りなさるお祝いの)、世の常の*折敷(定番の折り詰め弁当や)、衝重(重箱料理)、高坏(菓子皿)などの心ばへも(などの工夫も)、ことさらに心々に挑ましさ見えつつなむ(この際にとそれぞれが競い合っている豪華さでした)。　*「折敷(をしき)」は＜御盆＞とあるが＜折り詰め＞。「衝重(ついがさね)」は＜重ね盆＞とあるが＜重箱＞。「高坏(たかつき)」は＜脚付き皿＞とあるが＜菓子皿＞。と勝手に考える。

*五日の夜、*中宮の御方より、*子持ちの御前の物、女房の中にも、*品々に思ひ当てたる*際々、*公事にいかめしうせさせたまへり。*御粥、屯食五十具、*所々の饗、院の下部、庁の召次所、何かの隈まで、いかめしくせさせたまへり。*宮司、大夫よりはじめて、*院の殿上人、皆参れり。*「いつかのよる」は生後五日目の御産養。　*「中宮の御方」は冷泉院の后である、源氏殿の養女格で、秋の町の女主人でもある梅壺女御、秋好中宮のことだろうが、今でも六条院に部屋を構えながら、冷泉院で暮らしている、ということだろうか。良く分からない。　*「子持ちの御前の物」は＜子を産んだ御人に奉る贈り物＞だろうか、渋谷訳文には＜御産婦のお召し上がり物＞とあり、注には「こもちのおンまへ」は＜女三の宮をさす。＞とある。　*「品々(しなじな)」は＜等級別＝階級に応じて＞。　*「際々(きはぎは)」は＜別々の品物＞。現代語では「品々」と「際々」が逆の意味に見えるが、当時でもどちらも＜身分違い＞を示す語用はあるような気がする。　*「おほやけごとにいかめし

う」と言っても、御所扱いではなく、冷泉院の予算での差配かと思うが、御所と院との関係性が良く分からないし、もともと御所の催し事の規模や次第も分からないので、此処にある文字列で納得する以上の理解力は私にはない。ただ、中宮が個人的に身内ごととして裁量する以上の盛大さだったらしい、とは思って置く。　*「御粥(おんかゆ)」は炊飯のことらしく、「屯食(とんじき)」は握り飯らしいので、その「五十具(ごじふぐ)」というのは、「御粥屯食五十具」で＜御飯は握り飯で五十人分＞だろうか。　*「所々の饗」は「ところどころのきゃう」は六条院の使用人の各持ち場への慰労賄いで、その内訳が「院の下部(ゐんのしもべ、六条院の下働き者の詰所)」や「庁の召次所(ちゃうのめしつぎどころ、取次連絡などの雑用係詰所)」や「何かの隈(なにかのくま、その他の小者)」まで配慮が行き届いていた、ということらしい。　*「宮司(みやづかさ)」は＜中宮職の役人＞。「中宮職(ちゅうぐうしき)」は中務省に属する後宮事務役所らしい。「大夫」は「だいぶ」と読みがあり、中宮職長官のことで＜官位相当は従四位下の職ですが、平安以降は、后に縁故のある者を任用するようになりますので、納言以上の人（つまり三位以上）が兼任している場合が多いです。＞と「官制大観」サイトにある。　*「院の殿上人、皆参れり」は＜冷泉院の役職者が揃って宮の御出産祝いに六条院に参上した＞ということらしい。

七夜は、内裏より、それも公ざまなり(お七夜は御所から、これも公式の格式高い御祝事でした)。致仕の大臣など(ちじのおとどなど、政務から身を引いた藤原大臣などは)、心ことに仕うまつりたまふべきに(源氏殿に対しても朱雀院の内親王である宮に対しても、この帝からの御祝賀に際して格別のお祝いを申し上げるべきところだが)、このころは(最近は子息の衛門督が心配で)、何ごとも思されで(他に何も考える事が出来ずに)、おうぞうの御訪らひのみぞありける(一通りのお祝いがあるだけでした)。

宮たち(王族方や)、上達部など(政府高官たちなどが)、あまた参りたまふ(多数お祝いに参上しました)。おほかたのけしきも(表向きのお祝いの様子は)、世になきまでかしづききこえたまへど(他に無いほど盛大に御奉仕申しなさいましたが)、大殿の御心のうちに(殿は御内心に)、心苦しと思すことありて(不愉快にお思いになることがあるので)、いたうももてはやしきこえたまはず(心底から御喜び申しなさらず)、御遊びなどはなかりけり(音楽会などはありませんでした)。

[第六段　女三の宮、出家を決意]

宮は、さばかり*ひはづなる御さまにて(宮は非常にひ弱なお体での御出産で)、いと*むくつけう(とても御不調で)、ならはぬことの恐ろしう思されけるに(不慣れな初産に大変な思いをなさって)、*御湯などもきこしめさず(御重湯も召し上がらず)、*身の心憂きことを(御自分の身の不運を)、かかるにつけても思し入れば(御出産という慶事につけてもお考えになって)、　*「ひはづ」は＜弱々しいさま。ひよわなさま。＞と大辞林にある。現代カナだと「ひわず」だが、その音でも今に続く語感は無い。もし「ひ」が、「ひひな(雛)」「ひま(隙・暇)」「ひめ(姫)」などの語に類して、か弱さを表わす接頭語だとしたら、「はづ」は「恥づ」で＜引けを取る、劣る＞という語らしいので、「ひはづ」は幼い者に対する庇護すべき意識を示す語かも知れない。　*「むくつけう」は形容詞「むくつけし」の連用形「むくつけく」の音便で、現代カナだと「むくつきょう」と表わすべき発音だ。「むくつけし」は＜不快だ、気味が悪い、恐ろしい＞とあるが、此処では体調のことと取って置く。　*「御湯(おんゆ)」は、渋谷訳文に＜御薬湯＞とあり、与謝野訳文には＜御重湯＞とある。辞書では「湯」は＜入浴＞か＜薬湯＞のようにあるが、「聞こし召す」は＜召し上がる＞だから、私は＜御重湯＞と取って置く。　*「身の心憂きこと」は注に＜『完訳』は「わが身の不運を、不義の子の出生によって思い知らされる」と注す。＞とある。

「*さはれ(運命が如何であれ)、このついでにも死なばや(この際に死んでしまいたい)」　*「さはれ」は<「さはあれ」の約>で<それがどうであろうと>の意と古語辞典にある。此処では<自分の運命がどういうものであったとしても>という意味なのだろう。投げやりな思いであり、言い方だ。不幸なことだが、生きる張り合いを持つべき出産が、むしろ母子共に将来を悲観する思いを切実に深くする、ということは、さまざまな事情から有り勝ちだ。藤君と宮が罪の意識からうつ状態になるのは割と自然な流れだが、傍目にはこの出産は本当に慶事であって、冷静に事態を客観視せざるを得ない源氏殿にとっては、世間体からしても、御子の養育上の問題とは即ち将来の家庭調和を考えても、宮が我が物顔で威勢を張るのは許せないとしても、かと言って、伏せっていられるのは望ましくはないだろう。

と思す(とお思いになります)。

大殿は、いとよう人目を飾り思せど(源氏殿はとても上手く喜んでいる風に人目を繕おうとお思いだが)、まだむつかしげにおはするなどを(まだむずかっていらっしゃる赤子を)、取り分きても見たてまつりたまはずなどあれば(特にあやし申しなさりなどもしないので)、老いしらへる人などは(年の行った古女房などは)、

「いでや(いやはや)、おろそかにもおはしますかな(冷淡でいらっしゃること)。めづらしうさし出でたまへる御ありさまの(目出度くお生まれになった御子様が)、かばかりゆゆしきまでにおはしますを(こんなに物凄く美わしくいらっしゃいますのに)」

と、うつくしみきこゆれば(と御子を可愛がり申し上げれば)、片耳に聞きたまひて(宮はそれを聞き付けなさって)、

「さのみこそは(殿の御態度は)、思し隔つることもまさらめ(ますます冷淡になるだろう)」

と恨めしう(と無念で)、わが身つらくて、尼にもなりなばや(我が身の辛さに尼になってしまいたい)、の御心尽きぬ(とのお考えに思い至りました)。

夜なども、こなたには大殿籠もらず(夜も殿は此方ではお休みにならず)、昼つ方などぞさしのぞきたまふ(昼間に少し様子を見にいらっしゃいます)。

「世の中のはかなきを見るままに(世の無常をずいぶん見て来て)、行く末短う(老い先短く)、もの心細くて(薄ら寂しく)、行なひがちになりにてはべれば(念仏修行に心が向きがちで)、*かかるほどの*らうがはしき心地するにより(出産慶事が騒がし過ぎる気がして)、え参り来ぬを(そうは此方に参りませんが)、いかが(どうですか)、御心地はさはやかに思しなりにたりや(ご気分は優れましたか)。心苦しうこそ(大変ですね)」　*「かかるほど」は<今の出産時>および<その祝い事>あたりのことらしい。　*「らうがはし」は<乱雑だ、さわがしい>と古語辞典にある。仏道修行には出産慶事は陽気過ぎる、という言い方のようで、ある意味で本心でもあるようだが、それが我が子の生誕を祝う気持ちを妨げる、という言い方は全く説得力が無く、本心から喜んではいない、ということを自白しているようにさえ見える。いくら何でも、弱っている宮に厭味を言うほどの殿の意地悪さを表現している文なのではない、とは思うが。念仏修行は当時の便利な言い訳だったらしいが、万能ではなく、さすがにこういう場合にはその白々しさが際立つ。男の方便は女の実感に通じない、という作者の主張だろうか。

とて(と言って殿は)、御几帳の*側よりさしのぞきたまへり(御几帳の横から宮を覗き込みなさいました)。　*「側(そば)」は＜近く＞らしいが、座しているのだろうから御几帳の＜横脇＞なのだろう。

*御頭もたげたまひて(宮は御首を起こしなさって)、　*「御頭」は「みぐし」と読みがある。

「なほ(今でも)、え生きたるまじき心地なむしはべるを(生きるに足る力がないような体調の気が致しますが)、*かかる人は罪も重かなり(産後に死ぬ人は罪も重くなるようです)。　*「かかる人」は＜かかる事で死ぬ人＝出産で死ぬ人＞。「罪も重かなり」は「罪も重りかなり」で＜罪も重くなるとされているようだ＞。子供を育てられない母子共の不幸を言ったもの、なのだろう。

尼になりて(尼になって仏道修行の功徳を積んで)、もしそれにや生きとまると試み(もしそれで生き延びるかと試して)、また亡くなるとも(また死んだとしても)、罪を失ふこともやとなむ思ひはべる(修行で罪滅ぼしが出来るかとも思っています)」

と、常の御けはひよりは(といつものご様子よりは)、いとおとなびて聞こえたまふを(出家を口にして人生を客観視するかのような、とても大人びた言い方を申しなさったので)、

「いとうたて(また出し抜けに)、ゆゆしき御ことなり(大変な御申し様です)。などてか、さまでは思す(どうしてそこまでお考えになるのです)。*かかることは(こうした産後の肥立ちの悪さというものは)、さのみこそ*恐ろしかなれど(確かに恐ろしいものだが)、さてながらへぬわざならばこそあらめ(そうかといって生き永らえぬということではあるまい)」　*「かかること」は＜出産＞というよりは＜産後の肥立ちの悪さ＞と読んだ方が文意が通る。　*「恐ろしかなれ」は、シク活用形容詞の連体形「恐ろしかる」に論理仮定の助動詞「なり」の已然形が付いたものである「恐ろしか(る)なれ」の撥音便で、「恐ろしか(ン)なれ」の「ン」が無表記となっているもの、のように古語辞典の説明からは類推される。

と聞こえたまふ(と殿はお応え申しなさいます)。

御心のうちには(御内心では)、

「まことにさも思し寄りてのたまはば(本当にそのようにお考え尽きなさって仰ったのなら)、さやうにて見たてまつらむは(そのように出家させてさせ上げ申すのは)、あはれなりなむかし(情に適うかも知れない)。

かつ*見つつも(それとは違って今まで同様にこうして連れ添っていても)、ことに触れて*心置かれたまはむが心苦しう(ことに触れて宮が不義のあったことを思い出されてしまいなさるのが心苦しいし)、我ながらも(私としても)、え思ひ直すまじう(気持を変えることは出来ずに)、憂きことうち混じりぬべきを(意地悪をしてしまいそうなので)、おのづからおろかに人の見咎むることもあらむが(その内に私が宮に冷淡だと女房たちの目に付くこともあるだろうことが)、いといとほしう(全く実に不都合で)、院などの聞こし召さむことも(朱雀院や帝が宮の御不調をお聞き知りなさっても)、わがおこたりにのみこそはならめ(私の愛情が足りない所為にだけされてしまうだろう)。　*「見る」は＜世話する＞。「見つつ」は＜引き続き同様に世話する＞。　*「心置かれたまはむ」は注に＜「れ」受身の助動詞。女三の宮が源氏から疎ましく思われる意。＞とある。が、「れ」は助動詞「る」の連用形

だろうが、その意は受身というよりは自然発生で＜そうなってしまう＞と読むことも出来そうだ。源氏殿が続けて「我ながらも」と、以下に自分の事情を考えることからしても、この文は宮自身の事情と取って置く。

*御悩みにことづけて(むしろ、御不調を口実にして)、さもやなしたてまつりてまし(宮を御出家させ申し上げてしまう方が良いだろうか)」　*お目出度直後の出家は、自ら勤行修行に打ち込む以外に生き延びる見込みがない、という理由付けで、命に代えられない、という筋道の他に立つ言い訳は無さそうだ。

など思し寄れど(などと考え付きなさるが)、また(また一方では)、いとあたらしう(本当に惜しく)、あはれに(深く思い遣られる)、かばかり遠き御髪の*生ひ先を(これほど長い宮の御髪の生い先を)、しかやつさむことも心苦しければ(そうした尼姿に削ぎ落としのも忍びなく)、　*「生ひ先」は＜『集成』は「「生ひ先」は、人生の将来の意と、髪の延びて行く先の意を掛ける」と注す。＞と注にある。「御頭もたげたまひて」と設定されたカメラアングルというか場面情緒に添った言語表現とも言えそうだ。

「なほ(さらに)、強く思しなれ(気を強くお持ちください)。*けしうはおはせじ(大丈夫です)。限りと見ゆる人も(寿命と思える人でも)、*たひらなる例近ければ(平癒した例が近くにもあるので)、さすがに頼みある世になむ(まだまだ頼れる世の中のようです)」　*「けしう」は「異し(異常だ、大変なことだ)」の連用形「けしく(異常状態で)」のウ音便が副詞化して活用のない独立語として語用されたもの、のように古語辞典に説明がある。「けしうはあらず」は＜大したことでは無い＞くらいの言い方で、今で言う＜大丈夫だ＞の意かと思う。　*「たひらなる例近ければ」は紫の上の生還らしい。

など聞こえたまひて(などと申しなさって)、*御湯参りたまふ(宮に御薬湯を差し上げなさいます)。　*「御湯」は＜御薬湯＞だろう。

いといたう青み痩せて(とてもひどく青ざめて痩せて)、あさましうはかなげにてうち臥したまへる御さま(非常にか弱そうに打ち伏していらっしゃる宮の御姿は)、*おほどき(優雅で)、うつくしげなれば(可愛らしいので)、　*「おほどく」は＜［動カ四］おっとりしている。のんびりしている。おうようである。＞と大辞泉にある。ただ、病床にあって＜おっとり、のんびり、おうよう＞というのは、看病される受身であってみれば自明にも思え、特に言うとしたら高貴な＜優雅さ＞なのではないか。と言ってはみても、語感が掴めないので頼りないが。

「いみじき過ちありとも(重大な失敗を犯しても)、心弱く許しつべき御さまかな(甘く見て許してしまいそうな御姿だな)」

と見たてまつりたまふ(と拝し申し上げなさいます)。